

2014年4月5日



第59号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生

その53

地域パルチザンから全農へ 近藤康男さん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.



持ち前の語学力と行動力を生かし、反TPP（環太平洋経済連携協定）運動ではなくてはならない存在。とって、目立った動きをする人ではない。大概是縁の下の力持ち的役割に徹し、この雨合羽を着た写真は3月30日に雨と風の中でやった日比谷野音での反TPP集会とデモのときに撮ったものだが、この時も黙々と担当の受付の仕事を、テント張りから荷物運びまでこなしていた。

1946年というから、敗戦の翌年に生まれた。前期全共闘世代。1965年に京都大学農学部に入り、農業経済を専攻。卒業が1971年だから、6年間かけて卒業したことになる。

当時、彗星のごとく現れ、革命派の星となった京大助手滝田修が称した京大パルチザンに対抗して「地域パルチザン」を呼称し、仲間とロシナンテ社を設立、雑誌『地域闘争』を創刊。1970年のことだ。三里塚、北富士、立川反戦、富士市公害、横浜貨物線闘争など各地の住民運動とネットワークをつくっていった。淡路島空

港反対闘争では現地に住み込んだりもした。

その前の1967年6月から68年12月までの1年半ほど、世界の放浪の旅に出た。沢木耕太郎の『深夜特急』より前だ。

71年、学校を卒業して当時の全購連（全国購買農協連・現全農）に入る。全農では農協反戦青年委員会などをつくっている物議をかもしていたが、仕事は飼料部に属し、世界の穀物商社を相手に穀物商売に精を出す。この間ほぼ4年、全農の米国子会社に役員として出向して、穀物を農家から買い付け、集荷・輸送・貯蔵の一連の行程をこなして穀物会社や食品会社に販売する仕事に就く。この時、彼がやった大きな仕事に、遺伝子組み換え穀物を完全に分離・排除した「ノンGM（遺伝子組み換え）飼料」の開発がある。農場段階から輸送、貯蔵までの複雑な行程をノンGMで通すのはかなりの力技だ。

全農には1999年までいた。飼料部の課長を務め、このまま全農にいたら役員まちがいない、もったいないよと説得したのだが、彼は「全農はもういいよ」と退職して民衆交易のちいさな会社オルタ・トレード・ジャパン（ATJ）に転出した。全農時代に手がけたグローバリゼーションの仕事を、暮らしや生産の場に軸足を置いた仕事として完結させたいと考えたからだ。ぼく自身ATJとは90年代当初から関係を持っていたので、給料はまあ半分、安定性もいまいち、と脅したのだが、彼はきかなかつた。

結局、ATJで役員を務め、60歳で引いて、再び地域パルチザンに戻って、気ままな自由人生活を楽しんでいる。反TPPも三里塚も、世界各地への旅も自由人気質のなせる技だ。彼と親しく話すようになったのは確か60年代末だからもう半世紀たつ。お互い、余生を楽しんでいる格好である。

（大野和興）

実験村プロジェクト これまで、そしてこれから

<<北総大地夕立計画>>

雲の立つ三里塚を再び

平野靖識

芝山町^{こがんだ}小寒田にある通称「夕立の森」(私たちはそう呼んでいる)は、芝山町^{へた}辺田に住んでいた三ノ宮武二さんから地球的課題の実験村がお借りしたものだ。はじめは別の場所横堀の山林を借りたが、傾斜がきつく、おまけに取りつく場所がその斜面の上からで作業がしづらく当時の私たちの力量では手に余った。見かねた三ノ宮さんが代わりに貸してくれたのが今の夕立の森だ。田に向かって傾斜地もあるが広がりほとんどは台地上の平地だ。

それからもう15, 6年になる。三ノ宮家は、村の移転で成田市西三里塚に引っ越し、武二さんも一昨年亡くなった。今は倅の弘さんから借りている。

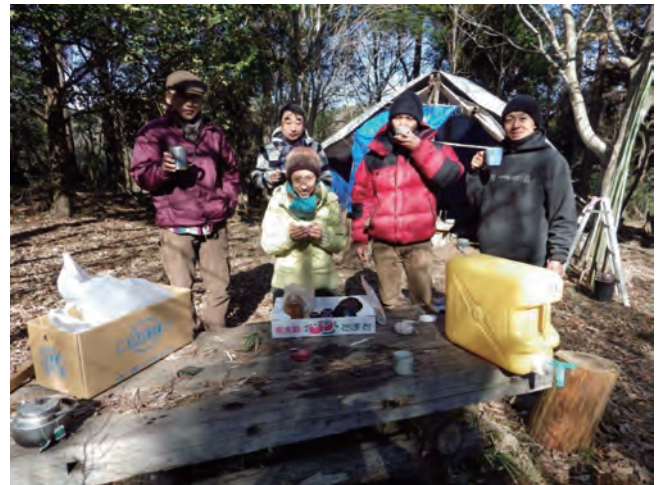
かつて「御料牧場の上には雲が起つ」と言われ、この地域の夕立は夏の風物詩だった。御料牧場の森や草地、そして県有林や広大な畑から立ち上る水蒸気が、九十九里から吹く湿気を含んだ海風と合わさって雲になり、雨となって降ったのだろう。

成田空港建設の過程で御料牧場の森をはじめたくさんの木が切りはらわれた、空港公団(現空港会社)はその数はおよそ30万本だと言っている。駐車場用地、高速道路、鉄道、ホテル、航空貨物の集配センターなど、関連施設のために切り払われた木々を加えれば、その数は40万本を下らないだろう。そのためかこの地域の気象に変化が生じた。夕立がめっきり少なくなったと、三里塚の農民はいう。

成田空港闘争の中から構想された地球的課題の実験村では、荒れた里山を再生して北総地域の水の循環を取り戻そうと考えた。それが北総大地夕立計画だ。林の掃除やきこり仕事のほか気象の学習会、どんぐり採取、竹炭づくりなど

をやってきた。いまは夕立の森の手入れはだいたい終わり、許しを得てお隣の杉林の掃除を手掛けている。

去年は若い人がポツリポツリ参加するようにもなった。すると我々のパワーもずっと上がり、掛かり木の処理や、丸木橋に丸木を運ぶなどの力仕事も、楽にこなせるようになった。この勢いで、今年はお隣菅沢さんの広い林の手入れを続け、その中から次のステップを考えたいと思っている。



<<麦・大豆畑トラスト>>

栽培は順調、会員増を

金森史明

2012年11月に播いた麦はその後、麦踏みのかいあってか順調に生育し、2013年6月に無事刈り取りを行うことができました。麦の収穫量は約540kgとまざまずの好収量でした。

翌7月には大豆のたねまきを実施しました。この日は強風が吹き荒れていてたいへんな日でした。まいた大豆の上にかぶさっていた土が強風により飛ばされてしまいむき出しとなってしまいました。おかげで発芽しないところが多くみられ、後日まきなおしました。

まきなおしたところも無事発芽したのですが、やはり生育にばらつきが出てしまいました。土

寄せや除草のタイミングをどこにあわせればいいのかと迷っているうちに雑草はぐんぐん成長してしまっていました。

それでも大豆は雑草に負けず立派に育ってくれました。9月ごろには枝豆がたくさんついていて「今年の大豆は豊作だ!」と思ったものでした。

しかし、10月に強い台風がふたつもやってきて、実がしっかり太る前に大豆は葉っぱを落としてしまい、小さめの実ばかりになってしまいました。

12月には大豆の収穫作業を行いました。あんまり期待していなかったのですが、結果は約330kgと2012年度よりも多くの大豆がとれました。

2014年2月には毎年恒例の味噌作りです。第一週に麴づくり、第二週に味噌仕込みとみなさんへ収穫物の発送を行いました。

今年は大豆（または生味噌）と小麦（全粒粉または玄麦うどん）の両方をお届けすることができました。生味噌は自分たちで作った麦による自家製麦麴を使用しました。

現在の畑には、2013年11月にまいた麦が育っていて徐々に大きくなっています。が、雑草も大きくなっていますので、このあたりでしっかりとやっつけておきたいところです。

麦・大豆畑トラストの作業日は基本的には毎月第二土曜日となっております。草取り手伝ってもいいよ、という方はぜひご参加ください。

毎年書いておりますが、麦・大豆畑トラストの会員も徐々に減りつつあります。もしお近くに興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひお誘いください。

これからも麦・大豆畑トラストのご参加・ご支援をよろしくお願いいたします!!

写真 上から

麦まき、大豆まき、枝豆がいっぱい、麴づくり



<<地域自立のエネルギー>>

1年半で6000kwを発電

樋ヶ守男

福島原発事故から3年、食だけでなくエネルギーも有機農業の一環とする取組みが広がっています。おひさま発電所の後に陽鶏発電所など一昨年建設した3軒が、この夏までに増設、新たに1軒の太陽光発電所建設も始まり4軒の出力総計が100kWをこえる予定です。今後さらに市民共同発電など、地域での再生エネルギー活用をすすめて、数年後の電力自由化が、国や大資本のいいなりにならないよう、地域のエネルギー自立を追及し続けます。

皆の力で木の根ペンションの屋根におひさま発電所が開設してから一年半、今年2月末までの総発電量は5990kWhでした。昨年からは、ペンション電気料が安くなっている分も大まかに、売電価格に上乗せして積み立て、建設費用の返済や将来のペンション修理、新たな発電所建設の費用にあてる事とし、電力会計を別会計にいたしました。

木の根おひさま発電所供給電力量と会計報告

2012年			
収入		支出	
おひさまカンパ99人	607,000	工事費	1,392,000
ペンション会計より	750,000	屋根工事費	442,050
実験村会計より	490,000	工事食費	15,000
夏祭残金ほか	6,550		
計	1,853,550		1,849,050
2013年			
収入		支出	
昨年残金	4,500		
おひさまカンパ5人	38,000		
ペンション消費電気代	20,000		
売電価格	112,602		0
残金	175,102		

2013年	電力量 kwh	売電価格 円
1月	206	8,652
2月	299	12,558
3月	255	10,710
4月	160	6,720
5月	226	9,492
6月	219	9,198
7月	283	11,886
8月	264	11,088
9月	274	11,508
10月	152	6,384
11月	180	7,560
12月	163	6,846
合計	2,681	112,602



<<森づくりとトラストに参加して>>

愉悦としての草取り

小林則彦

昨年秋からトラスト畑や里山に参加させていただくようになりました小林則彦です。現在50代半ば、テレビ番組の演出をしています。主にドキュメンタリー系の番組制作の経験を積んできました。皆さんお見知りおきのほどよろしくをお願いします。

僕は大了とりえもなくのんびんだらりと人生をやり過ごしてきましたが、本能のままやりたいことに手を出すことでますます楽しくは生きてきました。そして、今回、畑仕事、山仕事のお手伝いをはじめることになったわけです。

これまでの経験は合わせて4回。思った通り、いやそれ以上に面白いです。特に畑の雑草撮り、里山の下草取りにはまりそうになっています。

「ブチ、ブチ、ブチ！」っと雑草を根元から引っっこ抜く不思議な快感。腰の痛みにも耐えながらもその快感を求めて無心で雑草取りを続けていきます。痛みが限界に来て腰を伸ばして振り返るとそこにはあれだけ茂っていた雑草がきれいに取り除かれた畝と畦が。そこはかたない達成感。さらに、そんなことを繰り返しながら一日の仕事を終えて畑を見ると「人間の手って凄いな」と実感し大きな充足感を得ることができます。

僕が思うに、これはおそらく人間の脳に刻み込まれた快樂なのではないでしょうか。脳がこの手仕事をやらせたがっているんだと思ったりしています。

人類が行ってきた活動の大部分を占めるのは食べ物を得たり作ったりする活動でしょう。だから、そういう活動を好む性質が人間のDNAの中に刻み込まれているのかなと。あるいはそういう性質を持つ人間が進化の中で淘汰されずに残ってきたとか。

「下草取りが楽しい」という話をすると大いに不思議がられますが、皆さんはどうでしょう？仕事としている方は少し異なるのかもしれませんが、僕はこの手仕事が好きです。

でも、まあどこまで根気が続くかわかりませんが、とにかく、貴重な経験をさせていただいていること皆様に深く感謝しております。

『土と生きる 循環農場から』

小泉英政著（岩波新書）

国際空港建設という巨大開発に抗して“農地死守”を掲げて成田・三里塚の百姓が国家と真正面から対峙して闘いを開始した1966年から48年がたった。いまも土地を守り、裁判を闘い、農業を続けている何人もの三里塚百姓がいる。三里塚の百姓の闘いは、対政府と空港公団（現空港会社）、機動隊との力のぶつかり合いという直接的な闘いだけでなく、“もう一つの闘い”がある。

それは農業をめぐる闘いだ。長い闘いを家族とともに生きるには、生存の基盤である農業を長続きする確かなものにしなければならない。そのために基盤は土だ、ということに闘争の先頭に立った青年百姓たちは気づく。そこから三里塚農法ともいえる独自の有機農業が生まれた。本書の著者小泉さんは、三里塚地付きの百姓のせがれではなく、闘争支援で三里塚に来て、強制代執行で土地を収用された通称よねばあさん、小泉よねさんの養子となってこの地に踏みとどまり、百姓として生きてきた。

小泉さんの農業は、周辺の林と畑の循環を徹底的に追及し、多種多様な作物を回転させながらつくるところに特徴がある。自然と人の絶妙の付き合い方がそこにはある。有機農業というより自然農業といった方が小泉さんの実践にふさわしいが、同時にその農業で生きていくために収益も上げなければならない。本書はそうした農法をつくり上げるためのさまざまな工夫、失敗、喜びをつづった前半と、その営みが3・11原発事故による放射能汚染でとん挫してしまふ後半に分かれる。その間に、三里塚という地で彼がどのように生きてきたか、彼自身の闘争史が挟まれている。

福島第一原発の爆発で放出された放射線は三里塚に土にも降り注いだ。これまで数十年にわたってつくり上げてきた自然と人間との付き合いがずたずたに分断され、それは土とそこで生まれた食べものを介してつくり上げてきた人と人の関係まで壊していった。もう一度自然と人、人と人の豊かな関係を取り戻そうと踏み出すところで本書は終わる。（大野和興）

TPPのこれからを占う

農業ジャーナリスト 大野和興

二月下旬にシンガポールで開かれたTPP交渉の閣僚会合は取り立てての成果を上げることもなく終わった。TPP交渉はこのまま話がまとまらないまま漂流するだろうという見方と、いや日米どちらかの歩み寄りで急きょまとまる可能性がある、といった見方が、希望的観測もまじえて飛び交っている。その一方で国内の農業政策は国際競争に勝ち抜けるための“強い農業”づくりをめざして次々と新しい方向を打ち出している。TPP先取りともいえるものだ。TPPをめぐる状況をこの二つの側面から考えてみる。

◆オバマ来日でどうなるか

まずこれからの交渉の動きをどうみるか。シンガポール会合の前に、「この閣僚会後の成否は日米の関税交渉がどうなるかにかかっている」という情報が流れた。TPP交渉の中でも難航がいわれていた知的財産権や国有企業の優遇策などについては一定の前進があり、対立から話し合い合意に向かっているというのだ。多くの課題を多国間で話し合う場合、交渉参加国はそれぞれの課題でカードを切りながら全体を調整しあって最後の詰めをする。その最後の調整のカギを握っているのが関税問題であり、それが進まないとい全体の調整も進まない。TPP交渉のカギは農産物と自動車の関税をめぐるせめぎあっている日米協議にあり、という情報であった。

この見方が本当だとすると、TPPをめぐる次のヤマは4月下旬に予定されているオバマ来日時ということになる。安倍政権の国家主義的政策は米政権の不興を買い、日米関係は今や最悪という状況にある。その修復のために安倍政権はTPPで日米間の課題となっている農産物の聖域の踏む込み大幅譲歩をして訪日したオバマへの手土産とする可能性がある。

◆農業改革とTPP

第二の側面に移る。こうしたTPP交渉の推移をよそに、国内農業政策はすでにTPP後に移っている。コメ減反の段階的廃止に始まる一連の「農業改革」は次の三本の柱からなっている。

- 戸別所得補償政策の縮小とコメ減反の段階的廃止
- 農地規制の緩和：国家戦略特区の一つとして農業特区の創設
- 農業の六次産業化と輸出戦略

この三本の柱は安倍政権の経済成長戦略アベノミクスと重なり合って、国策の柱を形成している。来年度から動き出す農地中間管理機構（農地バンク）はそのためのツールとなる。同機構の実務は市町村や農協、信託銀行を含む民間企業などに業務委託することを想定している。農地行政の本体の中に民間資本が管理者として組み込まれていく仕組みがつくられたのである。

TPP反対運動と連動させて取り組まなければならないのは国家戦略特区問題である。安倍経済戦略は、この国家戦略特区によって「世界に打って出る／世界を取り込む」「世界で一番ビジネスのしやすい環境をつくる」と位置付けている。農業分野では、今後十年間で全農地の八割を経営面積20ヘクタール以上の大規模経営に集約し、コメの生産コストを全国平均で四割削減する。そのためのモデルづくりとなる国家戦略特区の農業分野では、農地法の規制を外して農外資本の農地と農業への参入を積極的に進めることになる。

◆解体する村

こうした一連の農政改革の狙いを一言でいえば、農村コミュニティであるむらの解体と、むらに住む専業農家、兼業農家、高齢農家、新規就農小規模有機農家などむら住民を丸ごと排除していくことにある。TPP交渉が政府の意図に反して不調に流れ、漂流したとしても、国内の農業と農村はTPPかともいえる状況に突入することになる。国内と国外の動きを一体でとらえた農民運動の力が問われることになる。

三春花見まつり～滝桜の下で四たびの集いを！～

2014年4月20日（日）福島県田村郡三春町にて

震災・原発事故から三年。滝桜に四度目の花が咲きはじめようとしています。この三年をともに歩んできた三春・芹沢農産加工グループの女性たちも、四年目の「農の春」を迎え、土を起こし種をまきました。そして、どうすれば安全な農作物や農産加工品をつくり、食べてくれる人と対話することができるか、模索を続けています。原発が作る電気は使いたくないと大勢の方の力でつくりあげることができた太陽光発電もまわり続けます。三春の想いを滝桜のもとで分かち合いませんか！ 三春でお会いしましょう！

【日時】 4月20日（日）朝7時貸切バスで東京駅前発～午後9時東京駅到着予定

【会場】 福島県三春町「三春の里田園生活館」 三春町大字西方字石畑487-1 0247-62-8010

【主催】 三春町芹沢農産加工グループ、滝桜花見まつり実行委員会、福島「農と食」再生ネット

【協力】 三春町、JAたむら、九州産直クラブ（福岡）、JA女性部、連帯ユニオン関西生コン労組女性部、地球的課題の実験村（千葉）

【参加費】 ◆バス乗車 大人9,000円（バス代、保険代、昼食代、交流会費を含む）片道乗車は6,000円
学生 5,000円（往復・片道共）◆当日現地参加（バス乗車なし）3,000円（昼食代、交流会費）

【プログラム】

6:50 集合 東京駅前丸ビル横（東京駅丸之内口・中央改札を出て向かい側）

7:00 バスで常磐道経由で三春へ。

12:00 三春到着。滝桜花見。

13:30 会場に移動し、昼食を食べながら地元のみなさまと交流

◆話題提供 小さな生産と加工で集落のみんなが生きる 石垣正憲（山形・小国町、農業）（予定）

◆話し合い：原発のこと、むらとまちの暮らしのこと、農と食のことなどじっくり語り合います。

17:00 常磐道で東京へ

21:00 東京駅到着（予定）。

【申し込み】 締め切り 2014年4月14日

大野和興 埼玉県秩父市大宮 5734-4 電話／FAX：0494-25-4782 mail：korural@gmail.com

※「滝桜花見まつり実行委員会」とは2011年3月の福島第一原発事故後、東京のNGO、有志で立ち上がったネットワークです。毎年春と秋に福島・三春を訪れ、地元の農家女性たちとの交流を続けています。



雨の中、反TPP集会とデモ

雨と風が吹き荒れた3月30日、東京・日比谷野外音楽堂で「もうやめよう！TPP交渉」と銘打ったTPP反対集会が開かれた。集会は午後1時から始まり、全国各地でTPP反対運動にとりくんでいる個人、団体は意見表明を行った。

農民側からは沖縄のサトウキビ農民、山形・置賜百姓交流会の川崎吉己さんが、それぞれの地域で地域の資源を生かしながら営まれてきた農業の大切さと、それがTPPによって潰されていくことの大変さが語られた。

折からの悪天候にもかかわらず、参加者は1300人を超えた。集会のあとデモ行進に移り、週末でにぎわう銀座通りを歩いて、午後4時散会した。



活動予定

4月 5日(土)	年次寄り合い	
19日(土)	北総大地夕立計画	山仕事
5月10日(土)	麦大豆畑トラスト	草取り
18日(日)	北総大地夕立計画	山仕事
6月14日(土)	麦大豆畑トラスト	麦刈り
21日(日)	北総大地夕立計画	山仕事
7月12日(土)	麦大豆畑トラスト	大豆まき 木の根プール

～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身の暮らしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

- 村民費 3000円
- 麦大豆畑トラスト 5000円
- 通信購読のみ 1000円 ※年3回

郵便振替 00140-3-92555
地球的課題の実験村

<問い合わせ>

電話/FAX：0476(26)1654 平野
メール：jikken-mura@jcom.home.ne.jp
URL：http://members2.jcom.home.ne.jp/jikken-mura/

【編集後記】

この1年、事務局長不在できたことは、かなりしんどかった。今年から佐々木さんが引き受けてくれることになっているので、安心していい。佐々木さんはぼくよりはよほど若いからこれも若返りということになる。どうかよろしくお願いします。(お)

■編集・発行／2014年4月5日「地球的課題の実験村」
■購読料／年間1,000円(年3回)

■59号編集担当／大野和興・平野靖識
■共同代表／柳川秀夫 千葉県山武郡芝山町香山新田22
大野和興 埼玉県秩父市大宮5734-4